

書評

[評者]

黒木春郎

外房こどもクリニック院長



今日の小児治療指針 第16版

水口 雅, 市橋 光, 崎山 弘 総編集

● A5・頁 1032 2015年9月

定価：本体 16,000 円＋税

[ISBN978-4-260-02084-8]医学書院刊

人は常に社会的局所でのみ生活する。自分の身の回りとその仕事、誰もがそこからの視点で世界を見る。そしてそのことの限界から逃れきれない。医師であっても他の職業であっても同様である。臨床医を例にとれば、働く場所が診療所か集中治療室かで求められるものは異なる。そうすると、己の発想も思考もいつの間にか自分の環境に規定されてくる。開業医と勤務医の乖離はそこから生じる。

本書をそばに置くことで、そうした限界を常に意識できる。そして時には超えることも可能となる。小児科医に求められるものは何であろうか？ その専門性とは何であるのか？ 小児科の臨床医であれば、自分の専門でない分野に対しても、小児に関連する全領域に少なくとも言及できる素養は必要である。本書はその要求に応えるものである。

例えば感冒の項目では、当然であるが抗菌薬使用は勧めていない。心肺停止に際してはPBLS, PALSを簡潔に紹介している。まさしく、プライマリ・ケアから救急現場まで網羅されている。夜尿症に関しても単一・非単一症候群という最新の分類に即して、DDAVPの使用に言及している。臍ヘルニアには圧迫法を紹介し、肛門周囲膿瘍には2種類の漢方薬を提示している。これらの疾患は以前ならば「経過を見れば治る」と言われていたものである。しかし、「経過を見る」という対応は患者さんの要望・悩みに応えるものではない。一方、本書の記載は実際の解決方法を明示

したものであり、patient oriented と言える。細菌性髄膜炎の治療には肺炎球菌の耐性化を考慮してバンコマイシンを紹介し、梅毒の治療では米国の治療指針を示しながら日本での実情に即した代替薬使用を勧めるなど、実践的な記載である。在宅医療の項では、そのマナーから章立てが始まり、保険診療の実際から福祉との連携の具体例まで挙げられている。小児に使用する薬剤の適応外使用に関しては社会的問題の提議があり、巻末には、脳死判定・脳死下臓器提供も記載されている。およそあらゆる分野を網羅している。

かつてアレキシス・カレル(1873-1944)は、医学は病人を細分化してしまったと言った。そして細分化された領域の専門家が自分の専門分野のみに拘泥すれば、その分野の理解さえも不完全になると述べた。本書は小児科とその関連領域を多岐にわたり網羅している。707項目を668名の専門家が執筆している。1970年初版の第16版であり、伝統ある書物である。伝統の上にさらに現在の知見が蓄積されている。本書を座右に置き、その目次の項目を眺め、自分ならどう対応するか考え、それからその項目を読み進める。それは、単なる座学ではなくその項目の著者との対話となる。そのような作業により私たちは「専門性」という桎梏を超えることができるであろう。

プライマリ・ケアから三次医療まで、救急現場から在宅医療まで、本書は小児を診療する全ての医師が座右に置くべき書である。